

中学生の部

最優秀作

内閣総理大臣賞

大分県臼杵市立南中学校

二年 白根 美里
しらね みさと

思いやりの連鎖が生み出す交通安全

国道へと続く片側一車線のまっすぐな一本道。田舎ではあるのですが交通量が多く、またまっすぐな道なのでスピードが出ている車も多いです。私は毎日、この道路を歩いて横断し学校に通っています。

私が渡る横断歩道には信号がなく、渡る時は、車が来ていないタイミングを見計らうか、車に止まってもらわなくてははいけません。渡るために誰かの大事な時間を奪ってしまっていると考えると、あの短い距離でも申し訳なく、私は止まってくれた車に向かって、必ず頭を何度も下げ、感謝の気持ちを伝えるようにしています。

ある日のこと、私はいつものように、止まってくれた車に頭を下げていました。するとその車を運転していた人が窓を開け、笑顔で親指を立て「グッドポーズ」をしてくれました。そんなことは初めてのことだったので、驚きました。そして、じわじわとうれしさが込み上げてきました。「気にしなくてもいいよ」「頭を下げてくれてありがとう」「気を付けて学校に行くんだよ」あのポーズに、どんな意味が込められていたのかは分かりませんが、いつもの朝とは違うすがすがしい気持ちにさせてくれた出来事でした。

その日、私は学校から家に帰るとすぐに、母にこのことを報告しました。あの感動を誰かに伝えたかったのです。しかし、母からは思いがけない言葉が返ってきました。

「でもね、それって義務なんだよ。」

母によると、運転者は歩行者や自転車者が横断しようとしている時には、横断歩道の手前で一時停止をして道を譲らないといけないと法律で決まっているとのこと。詳しく調べてみると、きちんと罰則も決まっています、違反すれば「三か月以下の懲役又は五万円以下の罰金」が科されることもわかりました。

私は、あんなにうれしかった朝の出来事が義務的なも

のだったのかと思うと悲しくなりました。しかし、横断歩道で止まってくれる車はほんの一部分で、止まってくれない車の方がとても多いです。片側の車が止まってくれても、もう片方の車が止まってくれず、なかなか渡れなかったり、ぶつかりそうになってひやりとしたりしたことが何度かあります。

そういった状況を考えて、あの朝止まってくれた人は義務を果たそうという思いだけで行動を起こしたのではないと思います。私があれほど感動したのは、止まってくれた人の思いと、感謝の気持ちをこめて頭を下げた私の思い、そしてさらにグッドポーズを返してくれた人の思いが重なった、「思いやりの連鎖」を感じたからだと思います。

事故が起こらないように考えられた義務ですが、それ以上に交通安全のために大切なのは相手を思いやる気持ちだと思います。私はこれからも安全に気を付けて横断歩道を渡り、止まってくれた人に「止まってよかったな」と思ってもらえるように、笑顔で頭を下げていきます。

優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

富山県滑川市立滑川中学校

一年 なか 中川 がわ まどか 円

自転車と私

「気をつけてね。」

母は、自転車にまたがる私に今日もそう声をかけた。

私は自転車に乗ることが好きだ。思いっきりペダルを踏んで、ビュンビュンと風をきって走る。自転車は、私をどこにでも連れていってくれるのだ。

小学校三年生のころ、友達と自転車レースをした。先に公園に着いた方が勝利、コースは自由だった。私は一刻も早く着くために車通りの多い道を進んだ。横断歩道の信号が点滅したのが目に入った。でも、私はまだいけると思い、自転車を走らせた。その時、車が私めがけて走ってきて、



ぶつかる寸前で止まった。何だかその場にいることが恥ずかしいような、怖いような気分になった。そそくさと運転手に頭を下げたあと、その場を去った。

もう少しおそく飛び出していたらと思うとゾッとする。事故になっていたかもしれない。死んでいたかもしれない。そう思うと、自転車に乗ることが怖くなった。家に帰り、今日の出来事を話すと、母は私に交通ルールのこと、実際に事故にあっている子がいることをとても心配しながら話してくれた。私はその後、学生の交通事故が絶えないことも知り、ますます自転車で乗ることが怖くなった。事故にあったらどうしよう。大好きだった自転車を遠ざけるようになった。

それから一年が過ぎ、交通安全教室が学校で行われることになった。私はそこで、交通ルールの大切さが改めて分かった。また、事故に関する映像も見て、交通ルールを守ることは命を守ることだとも気付かされた。一年前の私は、交通ルールを守らなかったから、あのようなことを起こしてしまったのだ。自分の失敗から、大好きな自転車を自分から遠ざけていた。私はもう一度、自転車で乗ることを決意した。

出発する際は前後左右を確認してから進む。走る際は信号を守り、スピードを出しすぎない。何より、安全第一で運転する。久しぶりに乗った自転車は心地良く、とても楽しかった。交通ルールを守り、自転車に乗ることができた。私は、また自転車が好きになった。

交通ルールを守ることは、命を守ることだ。自転車が大好きだからこそ、交通ルールを守り、いつまでも安全に乗りつづけようと思う。

「今日はどこに出かけようかな。」

何を見ることが、感じることができらるだろう。いろいろなものに出会うことにわくわくしながら、今日も交通ルールを守り、自転車に乗るのだった。

安全機能の罠

「新しい車買いたいな。」

仕事から帰った母が、夕飯を食べながらつぶやいた一言。僕は、この一言に、ある疑問を抱いた。僕の母は七年前古の軽自動車に乗っていた。それはそれで、まだ十分に乘れるし、同乗していて、僕自身不自由を感じることはなかった。僕が母に、新車購入の理由を尋ねると、母からこんな言葉が返ってきた。

「将来のことを考えると、安全性能の高い車に乗りたいたいだよ。」

確かに、最近の車のコマーシャルを見ると、とても便利な自動車が増えていることが分かる。車線のみ出しをブザーで警告してくれたり、衝突しそうになったら自動でブレーキをかけてくれる機能、バックする際には後方の映像をモニターに映してくれる機能、そしてカー

ナビゲーションも当然のように装備されている。ただ、そのような多くの機能は、本当に安全を保障してくれるのだろうか。

確かに、無いよりはあったほうが良いだろう。

僕の母は、悩んだ末、最新の安全性能を装備している軽自動車を買った。僕も、同乗してとても便利だという事を十分に感じた。しかし、新車の運転に慣れて一ヶ月程経ったある日、こんな出来事があったという。母が職場で、別の車を運転した時、その車に安全機能はついておらずバックモニターもついていないのに、自然と駐車する時、後ろを確認しなくなり、母自身もそういう自分の変化に、はっと気づいたということだった。

僕は、この出来事から、人は便利な物に触れていると、いつしかその便利が当たり前になってしまい、脳に染み付いてしまうのではないかと思った。そして実際に、それが証明されているニュースを、僕はインターネットの記事から発見したのだ。

「なぜ、自動ブレーキ作動せず。」

自動という言葉を聞くと、機械が完璧にこなしてくれるというイメージが強いのではないだろうか。この交通

事故に遭った人も「自動」を完全に信用していたので、注意力がかけ交通事故を起こしたのではないだろうか。

今回の出来事から、僕は、交通安全は人々の意識があって、初めて成り立つものであるということ強く実感した。そのため、僕はまだ運転をする立場ではないが、両親には、車を運転する時に、集中力を切らさないようにと、声をかけようと思う。また、一緒に車に乗っている家族は、前方や後方とともに確認することで、少しでも運転手をサポートして危険を避けることができると思うので、これはすぐにでも行動していこうと思う。

このような積み重ねが、僕の将来の交通安全マナーにもつながり、自動車運転免許を取る時にも役立つと思うので、小さなことかもしれないが、コツコツと実践していきたい。

阿波の黄走りと心のゆとり

道路交通法によると黄色信号では、「停止位置に近接し安全に止まることができない場合を除き、停止しなればならない。」つまり、黄色信号の場合、できるだけ止まらなければならないということだそう。

最近、私の姉が自動車学校に通い始め、交通ルールについて話す機会が増えた。いくつかの交通ルールについて話しているうちに、このルールについての話になった。その話になった時、「そんなことは小学生でも分かることだ。」と聞き流し、次の話題へと移っていったが、数日後、このルールは案外守れていないものだといいことに気が付いた。

その日、私は家族と一緒に買い物に出かけた。車に乗っている時、私はこの前話した交通ルールについて思い出し、道をゆきかう車を観察してみることにした。そして気が付いたのだ。「あの車、黄色信号で……加速している。」そ

してあるうことか、続く後続車も同じように加速し、そのまま走り去ってしまった。

「姉ちゃん見た？さっきの車、黄色で加速しとったよ。」

「ああ、なんか『阿波の黄走り』っていう言葉があるって誰か言うとしたなあ。」

阿波の黄走り……。ここは昔、阿波国と呼ばれていた徳島県である。気になって調べてみたところ、阿波の黄走りとは、「黄色信号で車が止まらない」「青から黄に変わるとスピードを上げる」というものだそう。また、徳島新聞が県内のドライバーに意識調査したところ、「黄色で止まる意識はない」「止まると後続車の迷惑になる」などの声があったそう。なるほど実際に阿波の黄走りは、文化のように県民に根づいてしまっているようだ。

さらに調べてみたところ、日本自動車連盟の自動車ユーザーを対象とした交通マナーについてのアンケートが出てきた。見てみると、「全般的に交通マナーが悪いと思う」で一位香川県に続き、二位は徳島県であった。徳島県民としてはなんとも情けないことではあるが、これは決して他人事ではないと思う。私は今年、十五歳になり、あと三年で車の免許がとれる年齢になる。車は遠くまで自分で

優秀作

文部科学大臣賞

兵庫県関西学院中学部

三年 五十川 智也

ロードバイクと願い

僕は、今年の六月の終わりにロードバイクを買ってもらった。

しかし、買ってもらうには家族で話し合いがあり、すんなり買ってもらったわけではない。何度かの話し合いが待っていたのだ。

友人がロードバイクに乗っていて、それにさせてもらった時すごく気持ちが良かった。気分がスッキリする感じだった。僕は迷うことなくロードバイクが欲しいと思った。今、乗っている自転車は折り畳み式で家族共用だったのも理由の一つだ。共用の自転車しかないのだから話せば

行くことができ便利であり、電車、バスなどの交通機関のあまり発達していない私の住んでいる地域では、日常生活に必要不可欠なものであると思う。だが、まわりの車につられて、県独特の間違った常識のようなルールを無意識に自分の運転に取り入れてしまっってはいけないと思った。

私の住んでいる徳島県は、四国のお遍路のお接待文化が根付いている県でもある。何の見返りも期待せず、ただ通りかかりのお遍路さんに親切にする「お接待」。そんな心のゆとりや文化を交通ルールの中に取り入れていきたい。私はそんなドライバーになりたいと思う。

買ってもらえると簡単に考えていたのだ。もし、問題があるとすればお金の問題ぐらいだろうと思った。

父と母に「ロードバイクを買って欲しい。」と言うと、「何故？」ときた。やっぱりこうきたかと思っただが、簡単に理由を話す想像もしていなかった話し合いが始まったのだ。

「ロードバイクが後ろから車にぶつかられて亡くなった人がいたよね。」

「すごいスピードが出るだろ。」

「歩道は走れないよね。サイクリングロードない所は車道だよ。」

「車の事故に巻き込まれる可能性が高いな。」

次から次へと出てくる会話に少し不安になってきた。その内、話は全く違う方向へと変わっていった。

母が小学生だった頃、学校の門に一番近い交差点で母の祖父がボランティアで毎朝交通整理をし登校中の子どもたちに「おはよう」と声をかけ、「おはようおじさん」と呼ばれていた話だった。その交差点は信号がなかったため、子ども達が横断歩道を渡る時は母の祖父が車や自転車を止めていた。暴言を吐く人も多かった。だが、同じくらい

劳いの言葉を言ってくれる人もいたそう。母はいつも車や自転車や単車は便利だが凶器にもなると聞かされて

いた。この話の後、父と母は自転車や車がどれほど怖いと話しだした。加害者になりたくなくてもなってしまうことがある。人につかかって怪我をさせてしまうこともある。自転車車が車にぶつかってしまうこともある。便利だけど怖いのだと話された。僕は、真剣に考えた。本当にロードバイクに乗ってもいいのか。だが、行動を起こさなければ何もできない。なら、どうすればいいのか。僕は、自分で決め事を考え実行することにした。まず最初に河川敷のサイクリングロードを走ろう。慣れてから一般道を走ろう。ヘルメットは安全性の高いものにしよう。信号のない交差点は注意深く走ろう。人が歩いていて避けられない時はロードバイクから降りて歩こう。ライトはつけるが、なるべく明るい時間に走ろう。この決め事を父と母に話し晴れて買ってもらうことができました。

ロードバイクが手元にきて、いざ乗ってみると驚くことばかりなのだ。自転車専用レーンに停めてる車、店先の道路に停めている自転車。信号が赤でも横断歩道を渡る人。信号のない横断歩道を渡るのを待っている人がいても止

佳作

警察庁交通局長賞

長野県千曲市立屋代中学校

一年 岡田歩

おかだ

あゆみ

祖父の願い

僕は願う。一人でも多くの人たちが交通ルールを守って事故が減ってほしいと願う。

僕は思う。この気持ちを大人になっても忘れないでいようと思う。

まらない車。無灯火の自転車。交通ルールなんて御構い無しだ。ただ、これらのことは一人一人が気をつけなければいいことだ。それによって事故はかなり減るのではないかと思う。ロードバイクに乗るようになって気にしなかった景色が目に入るようになった。買わなければ家族で話すこともなかったかもしれない。怖さを知らないまま大人になっていたかもしれない。とても良い機会だった。

去年、祖父が亡くなりました。九十歳でした。生前の私の祖父は、軽自動車、普通自動車、大型のトラックまで、自家用から仕事用と車の運転が得意でした。得意というより、車が生きがいだったのかもしれない。その祖父の様子を少しおかしくなったのは、私が小学五年生の時でした。ある日、「ウインカーの消し方が分からない。」と、いうのです。一時間も二時間も言うって車の中から出てこないのです。いろいろ何とかして、ウインカーを消そうとしているのです。とうとう諦めて、ガソリンスタンドへ助けを求めたそうです。そこで店員さんに、ウインカーを消し

てもらい帰ってきたのですが、「どうしたんですか、こんな簡単なこと。」と、言われたことが面白くなく、またウィンカーを点けてしまい消せなくなりました。結局、父が仕事から帰ってきて、ウィンカーは消されました。その後も簡単な車の操作ができなくなっていました。その頃、私の住んでいる地区では、小学一年生が車にひかれて亡くなるという悲しい事故があったばかりで、私達家族はもし、祖父が子供達を巻き込む事故を起こしては大変だと、家族会議の毎日でした。

どうしたら車の運転をやめさせられるのか、まず、直接話してみようということになり、母が話し出すことになりました。母は、高齢者の車が小学生の登校の列に突っ込んだ話や、近所で亡くなった小学一年生の児童のことなど、祖父自身が起こしてしまったらどうするのかと話をしました。しかし、祖父は自分は大丈夫だと言っばかりでダメでした。その間にも、祖父の認知症の病状は進んで行き、車で出掛けたきり帰り道が分からないなどといったことが起こるようになりました。母は祖母と相談し、車の鍵を隠すことを決めました。すると祖父は、暴れ出し手がつけられなくなりました。「鍵を出せ、鍵を出せ。」と、大声を出

ても困らないような体制をとり、はっきりとした決まりが欲しいのです。でなければ、長年車を運転してきた人が、簡単には運転はやめられません。プライドもあり、なかなか家族の言う事を聞いてくれません。よく、事故を起こした高齢者の家族が、「何で運転させているんだ。」と怒られ、非難されますが、家族だって大変な辛い思いをしているのです。もう戦争でした。このことを私は一番に、世の中の人達に知ってもらいたいです。

群馬県沼田市立薄根中学校

一年 松田紫瑛

高齢者ドライバーについて

「今日も高齢者ドライバーによる事故のニュースです。」
こんなニュースをよく耳にします。私には、もうすぐ七十才になる一緒に暮らしている祖母がいます。私の祖母も車の運転をしているので、そのようなニュースを聞

し、まるで人が変わったようでした。それでも、人に危害を与えるわけにはいきません。母は警察に相談に行きました。そこで母は、こうアドバイスを頂きました。それは、「車は修理に出したよ。まだ修理中だよ。部品がないから廃車だつて。」と、言ってみてください。車のことは徐々に忘れていくはずですよ。すると、祖父は本当に車のことを言わなくなりました。しかし車は、本当に祖父の生きがいだつたのです。

それからの祖父は、無力で何をする気も起きなくなりました。そして転倒したのをきっかけに、寝たきりになり、介護生活になってしまいました。寝たきりなので、母も祖母も介護は本当に大変だったようですが、他人を車で殺してしまうのではないかと、心配からは逃がれられたと言っていました。他人の命はこれで守れることができたのですが、祖父の人間としての人權はどうなるのでしょうか。あんなに車を運転したかった祖父の人權はどうなるのでしょうか。

そこで私は国にお願ひがあります。これだけ高齢者の車の事故が多発しているのですから、法律で七十歳になったら全員免許は無効と決めてほしいのです。免許がなく

くと他人事とは思えずともつらい気持ちになります。高齢者ドライバーによる事故の原因は、ブレーキとアクセルの踏み間違いや、視力の低下、判断力の低下があるといわれています。

私は母と話し合い、高齢化が進む世の中でどうしたら高齢者ドライバーによる事故を減らして、免許がなくても高齢者が不自由なく生活ができるのか考えてみました。

まず、一定の年齢になったら免許を返納するとか、家族が強制的に免許を取り上げるといった意見を聞きます。私が住んでいるような「一人一台車社会」と呼ばれている地域では、都会と違って公共交通機関が充実していないので、どこに行くにも車を使って行く生活に慣れてしまっています。だから簡単に免許を返納するという決断が難しいと私は思います。私の伯母は、祖母に何かあってからでは遅いので、七十才になったら運転を辞めるようにと言います。でも祖母はまだ仕事をしているので、仕事を辞めなければならぬし、自由に買い物や美容室などに行くことができなくなり、まだ出来ることを奪ってしまうことになります。また祖母が病院や買い物に行くときは、父や母が送迎することになり、仕事や私たちの送迎もしてい

る父と母の負担が増えてしまいます。

そこで、私と母が話し合ったことは、現在も少しずつ進んできている定期的な物品の移動販売や送料無料のネット販売、食料や日用品の定期便の充実。医療関係では、オンラインによる受診や薬の定期配達などの強化。タクシーやバスなどの公共交通機関の無償化。ドライブアシスト車の充実が今以上に求められると思います。

私は高齢者ドライバーによる事故を減らすには、運転をしないということだけで解決できるということではないと思います。本人の意志はもちろん周囲の理解や協力が必要です。高齢者が運転を辞めても、不自由なく暮らせる環境作りが進むことを強く願います。

そう考えると、今私ができることは祖母が運転をする時に「気を付けてね。」と言ってあげることしかありません。なので私は、この言葉を祖母に伝え続けたいです。

ら進んでよし。合格や!!」

弟のやる気スイッチが入ってくれた。だんだん減速、止まったら車が来なくても左右確認。そして、発進。

「いいぞ!!合格!!かっこいい!!」

一気に、見えて安心してできるような運転に変わった。

そんな弟を見ていたら、私の自転車の乗り方はどうだろう、と思った。はたして私は信号のない交差点で、しっかり止まったり、左右を確認していただろうか。弟に注意しているほど、私もちゃんと停止していないあと心の中で反省した。

その夜、この春から中学校に進学する私は、自転車通学になる。自転車での通学路を学校に提出するため、自宅から中学校までの道をたどりながら、話し合ううち、だんだん、私と母の意見がぐいちがってきかた。私は車通りの少ない細い道を提案した。車を気にせず、気楽に走れるからだ。でも母は、

「信号のある大きい道の方がお母さんは安心かな。」

と言った。

「なんで?大きい道の方が車いっぱい通るし、危ないやん。」

福井県勝山市立勝山南部中学校

一年 横山 月乃

安心してもらえるような運転を

「スピード出しすぎ!!止まれで止まって!!」

“キキー!!”

危なっかしい急ブレーキの音がした。

この春、自転車に乗れるようになったばかりの弟は、まだスピードの加減が分からず、全速力でとばし、急ブレーキで止まる。ちゃんと止まれで止まるよう見はつていないといけないので、弟が自転車に乗るたびに母にその見守りを頼まれた。

「止まれ“の線で止まって!!”

と、いちいち言うのがつかれた私は、弟が止まることを意識できるような作戦を考えた。

「この石の所からブレーキするんやで。この線から出たら、アウト!!」

「線で止まったら、車が来ないか、右と左を見る。そして

私はとっさに言い返した。でもすぐにはととした。母は、弟の自転車を見はつている私の気持ちと一緒になんだろうなと思った。

「車通りの少ない細い道やと油断するでやろ。」

母が言い出す前に私が答えた。

「あと自分だけでなく、車運転してる人も油断してるかもしれないな。」

と母がつけ足した。そして

「常に『かもしれない』と思って運転しないとイケないよ。」

と、母は言った。「ここから車が来るかもしれない」「この車はちゃんと停止しないかもしれない」「そんな場所を、通学路の中から見つけ出し、今度その道を自転車で通ってみようということになった。」

弟の運転はまだまだ見守りが必要だけど、意識するだけで全然ちがう。今度の作戦は、「かもしれない」運転ができるよう、私が車の役になってみようと思った。

そして、私自身も、中学校までの通学路を自転車で通ってみた。かもしれない場所をチェックすると、だんだん自転車通学が楽しみになっていった。

これからは、歩いている人や車を運転している人からも、そして家族にも安心してもらえるような運転を心がけたい。

福井県立高志中学校

二年 吉本 由唯 よしもと ゆい

「ヒヤリ」から命を守る

あなたはヒヤリ・ハットというものを知っているだろうか。ヒヤリ・ハットとは「重大な災害や事故には至らないものの、直結してもおかしくない一歩手前の事例のこと」という。文字通り突発的な事象やミスにヒヤリとしたりハットしたりするものである。」という説明がされる。この言葉が最近家族の間で話題になったことがあった。

私の七十三才のおじいちゃんは毎日車の運転をしている。お母さんの仕事の送り迎えと自分の仕事の行き帰りだ。お母さんは免許はもっているのだが車はもっていない。そのためおじいちゃんの送り迎えには私たちが

家族はとても感謝していた。もちろん私も塾の送り迎えや出かける時などに運転してもらうことが多く、必要な存在だった。しかし、その中で「ヒヤリ」と感じる運転が多くなってきたのだ。

その例として同乗者のお母さんや、おばあちゃんに注意されることが多くなったのだ。青信号なのに気がつかないで止まったままだったり、赤信号なのにそのまま走ってしまいそうになったりした。またよく通っている道にもかかわらず道をまちがえてしまうこともあった。このような「ヒヤリ」とするようになり、私は不安に思っていた。なぜならハイリッヒの法則というものがあるからだ。一つの重大な事故の背後には二十九の軽微な事故があり、その背景には三百のヒヤリ・ハットがあるという経験則だ。つまり私のおじいちゃんでも小さな「ヒヤリ」が積み重なると軽傷を負う、負わせてしまう事故が起きる。それが積み重なると重大な事故につながる。私には大切な家族に危険な目には絶対に遭ってほしくない。

このような思いがあり私は家族にある提案をした。それはヒヤリ・ハットマップというものだ。ヒヤリ・ハット

マップづくりは地域の住民一人一人がヒヤリ・ハットした体験を基にして交通の危険な場所を考えて地図に表す

活動のことだ。私たちはおじいちゃんが車に乗っているときに危険に感じた場所を書きこんだだけでなく、私やおばあちゃんの徒歩や自転車に乗っているときに危険に思う場所も書いた。この地図を作ったことによって、車に乗っているときにおじいちゃんにも「気をつけてね」と声をかけることができ、「ヒヤリ」を未然に防ぐことができようになる。またお父さんは私の登下校中の危険な場所を把握でき、安心だとも言っていた。

ヒヤリ・ハットマップのおかげで私たちはヒヤリ・ハットを防ぐことができ、安全に暮らすことができた。これは家族の命も守ってくれるものだと思う。また各家族が作ればより多くのデータが手に入り、地域全体が安心になる。この地図によって一人一人が地域に愛着をもって、ヒヤリ・ハットを少なくし、交通事故が減ってほしい。

千葉県柏市立逆井中学校

三年 岡安 瑠璃 おか やす るり

思いやること

私が普段使っている通学路は、ガードレールが無く歩道が狭い。そして歩道のすぐ横には車が走っている。交通量が多く、よく大型トラックなども走っている。私はなるべく歩道の中でも端に寄って歩くことを意識している。それでも歩道が狭く、はみ出してしまうことが多い。意識していても、気づいたら私の後ろから来ている自動車やトラックがスピードを落とし、私を避けて走っている。その度に申し訳ない気持ちになる。

中学一年生になる頃、私はこれから使う通学路の確認のため、家から学校まで一通り歩いた。実際に歩いてみると、歩道と車の距離がとても近く、これから安全に登下校できるかとても不安だった。中学校に通い始めてから少しの間はとにかく車との距離を空けることを意識した。そのかいあってか、運転手さんにわざわざスピードを落

としてもらうことはあまりなかった。しかし私はだんだん通学路に慣れていき、車との距離をなるべく空けようという意識はいつの間にか、ぶつからなければ大丈夫という余裕に変わっていた。自分の体は以前よりも道路に出ていると思う。運転手さんも車がぶつからなければ大丈夫だと思っているだろう、と勝手な思い込みをしていた。しかし歩いていると、絶対にぶつからない距離にいるのに、それでも避けて走ってくれる車ばかりだった。なぜ運転手さんはそこまで人と車の距離を空けるのか疑問に思い、父に聞いてみると、

「車を運転する人は常にもしものことを考えているんだよ。歩行者の横を走るときは、もし歩行者が急に転んだり倒れたりしたら、ということ想定して、わざと間隔を空けるのだと思う。自分もそうしているよ。」

と教えてくれた。それを聞いて、私は自分がしていた行動を反省した。運転手さんは、私以上に周りを見ているのだな、と思った。それから私は、再び車との距離を空けるよう意識するようになった。

私は今も、外を歩くときは常に意識している。また、距離だけでなく運転手さんの気持ちも考えるようになった。

いっばいに広がっていたわけでもないし、あぶない走り方をしていたわけでもない。確かに、部活帰りで人が多く、細い道ということもあって混雑していた。大きな車が通りにくくて、イライラするのも分かる。だからといって、あのような言葉を吐いても良いのだろうか。私には、恐怖心、疑問など、様々な感情が生まれた。

家に帰って、そのことを家族に話した。すると母や祖母は「通学路を通っているのだから、車が気を付けるべきだと思う。」と言いながらも「命がなくなったらおしまい。」とも言っていた。確かにどんなに正しい行動をしても、事故がおきれば死んでしまうかもしれない。青信号で横断歩道をわたっていたとしても、信号無視をした車とぶつかれば、けがをするのは当然歩行者だ。「止しき」が命の保証にはならないのだ。

母は車の事を「殺人マシン」と思って運転するようにしているそうだ。車は便利だが、一歩まちがえれば大きな事故となる。他人の命までも奪ってしまえば、「殺人犯」と言われても仕方がない。今までの様な幸せな人生を歩むのは困難になるだろう。また、崩れるのは自分の人生だけではない。相手の人生も壊してしまう。その家族、友達と、自

私今まで何事もなく登下校できていたのは、運転手さんのおかげだ。交通事故で怪我を負ってしまった人や亡くなってしまった人がいることをよくニュースで聞く。大抵は、どちらかの人、あるいはお互いの不注意で事故が起きてしまう。事故を防ぐには、お互いを思いやることが大切だと思う。もともと人と人が思いやる気持ちを持って、事故も減るのではないだろうか。私はこれからも、どんなときでも相手を思いやる意識を忘れないでいたい。

岡山県倉敷市立東陽中学校

三年 中島 菜乃

今私達にできること

自転車で下校中、私の横を黒い車が通り過ぎた。その時車中から投げつけられた言葉は

「じゃまなんじゃくそがき。」

その腹立たしさに満ちた強い言葉に衝撃を受けた。道

分が起こした事故が原因で多くの人が悲しむことになる。車に乗っている時背負っているのは、自分の命だけではないという事。車を運転するのであれば、誰もがこのことを心に置いておく必要があると思う。

では、運転手だけが気を付ければ良いのだろうか。それは違う。また車は運転できない私たちにも気を付けるべきことは当然あるはずだ。考えてみれば、私自身自転車に乗っている時、イライラしてしまうことがある。それは歩くのが遅い高齢者の方などがいて、その道が通りにくい時だ。私は、はっとした。今は車に乗っていないが、車に乗った時に同じ状況になれば、事故をおこしてしまうかもしれない。あの心ない言葉を投げってきた人と同じではないかと。今、私たちにできること、それは全ての道を自分の道だと思わないことだ。自分の道だ、と思い込んでしまうから、あおり運転のようなことまで起こってしまうのだ。事故は人に余裕がなくなった時におこる。それは運転手側でも、歩行者側でも同じだ。私も焦っていると心に余裕がなくなり、周りが見えなくなってしまう。家から一歩出たら、そこはみんなの道だ、そう考える事が大切だと思う。中学生である今のうちから、この考えを育てていく

ことが、将来、交通事故を減らすことに繋がるのではないだろうか。

みんなの道であれば、どんな人でもその道を通る権利がある。みんなが安全に通れるように一人一人が気を付ける義務がある。私も自己中心的な気持ちに流されることなく、周りに気をつけ、周りの人の事を考えていきたい。そして将来、車を持ったら、誰も怖い思いをしないような、思いやりのある運転をしようと思う。すべての道に笑顔があふれるように。